

日韓青年親善交流のつどいを終えて

一般参加青年

近年、輸出管理の厳格化や元徴用工訴訟問題によって日韓両国関係が非常に悪化している。その中で、各地で予定されていた自治体間の日韓交流事業の中止が相次いでいる。私は、この「日韓青年親善交流のつどい」ももしかすると中止になるのではないかと不安な気持ちは開催当日までであったが両国は政治的対立を乗り越え、この事業は無事に開催された。今回、私はディスカッションとルームメイトとの雑談で得た体験を中心に振り返っていききたい。

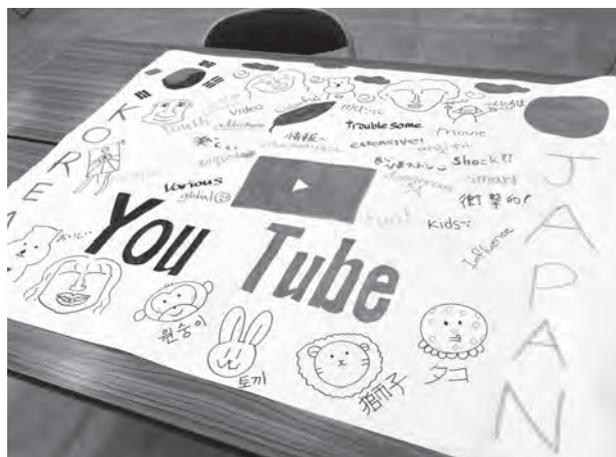
まず、ディスカッション内容を紹介する。私のグループは「国際交流が青年個人の進路に与える影響」について話し合った。日韓両側の参加者も事前学習をしていたため、議論が尽きず、非常に盛り上がった。私達は話し合った末、国際交流は個人の視野を広げ、物事をより多面的・客観的に見られる目線をもつことにつながるという結論に達した。話し合いの中でもチームメンバーである韓国女性の経験談が特に印象に残った。彼女は学生時代に日本人と交流したことをきっかけに日本を好きになり、卒業後は日本の企業に勤めることにした。その話を聞いて、国際交流が人生に大きな影響を与えると実感した。

次に、ルームメイトである韓国青年について話したい。私達は一日のプログラムを終えた後、部屋で雑談をした。話題は私生活から日韓両国関係にまで広がり、とても有意義な時間だった。その中で特に印象に残った話は二つある。一つ目は、歴史問題で日本に対し良いイメージを持っていなかった韓国青年がこのプログラムを通じて、初めて実際に日本青年と交流し、日本を韓国と距離が近い国だと再評価したことだ。また、二つ目はお互いに将来の夢について語り合ったことで、社長や弁護士になりたいという夢を語ってくれる人がいた。

ここで改めて振り返ってみると、以上の体験は僕にとっての人生の宝だと思う。日韓両国関係が悪化する中でも、このつどいにおいて、両国の青年が無事に交流することができたことで、改めて政治と民間は分けて考えるべきだと思った。このつどいが終わった後も、出会った韓国人と日本人たちとのつながりは続いている。私達青年が民間外交を担い、少しでも今後両国の関係改善に貢献していきたいと思う。



仲良くなった日韓青年と一緒に写真を撮る
(筆者が一番左)



ディスカッションの成果を模造紙にまとめる

つどいから学んだ交流の大切さ

令和元年度日本・韓国青年親善交流事業 参加青年

今回のつどいは、約2ヶ月後の日本・韓国青年親善交流事業で訪韓する際に一緒に活動する青年たちと前もって知り合い、仲を深められるいい機会だと感じて参加することを決めた。最初に想像していた韓国人の友人との出会いだけでなく、たくさんのことを学び、考え、気づきを得た3日間であった。

ディスカッションで私の班は、「青少年のネット中毒に対する社会的認識と治療プログラム」について議論した。日本ではワンクリック詐欺や個人情報の取り扱いなどの予防教育が中心だが、韓国では、法律で年齢によってインターネットの使用時間が決まっていたり、治療プログラムが豊富に用意されていたりと、ネット中毒に対する問題意識が日本に比べて高いことに驚いた。ドラマやニュースのみを通して受け取る情報だけでは物事の捉え方に偏りが出ることがあるため、今回のように直接生の声を聞く機会を持つことも大切であり、また他人の考えを知ることは自分自身の発想の柔軟性にもつながると感じた。

このつどいには日本全国から青年が参加している。つどい当日までは、日本・韓国青年親善交流事業の既参加青年と来年度以降の募集に応募したい青年だけが集まるものだと思っていたが、その予想はいい意味で裏切られた。内閣府の他事業に参加したが、そこでは今回のつどいのような催しがないため、韓国語は話せないけれど交流がしたくて参加した人や国際交流に興味があっ

て、国を問わず様々なプログラムに参加している人、今まで国際交流に興味はあっても一歩踏み出せなかったが、Facebookや学校に掲示されていたポスターを目にして、勇気を出して一人で参加した人や、中には韓国にいいイメージを持っていない親に参加を止められたが、韓国青年と交流がしたいという思いから参加した日本青年もいた。つどいに参加した背景は人それぞれだからこそ、国際交流に積極的な日本青年と過ごした時間は、視野を広げ、今後の活動に対する意欲向上につながった。

今回のつどいを振り返って最も心に残っているのは、日韓の参加青年みんなが口を揃えて言っていた「外交問題は上手くいかない時もあるが、市民レベルの国際交流、そして国籍を超えた人と人との交流は大切に続けていくべき」という認識だった。今のような難しい時期だからこそ、今回のつどいの開催は意味のあるものだったと感じる。様々なバックグラウンドを持った人々との触れ合いにおいて、相手を理解しようとする姿勢や、まず自分から一歩踏み出す勇気が相互理解につながるのではないだろうか。これからも国際交流に参加する者として、しっかりと心に刻み、日韓交流の発展に尽力していきたい。

貴重な機会をくださった内閣府、一般財団法人青少年国際交流推進センター及びつどい実行委員の皆様から感謝を述べたい。



同じ班の日韓青年で記念写真を撮る
(筆者下の左から2番目)



運動会で日韓青年がチームとなり絆を深める
(筆者右)

日韓青年親善交流のつどいを終えて

一般参加青年

今回の開催日程の時期は、正に日韓政府間の関係悪化が加速している時期であったにも拘わらず、中止となる事なく無事開催され、初日に安堵したことを覚えている。今回のつどい参加を通して民間交流と政府間の問題は切り離して考え、互いに交流していく努力をすべきだと強く思った。何故なら、直接交流することは相手国に対する誤解や偏見をなくす近道であり、またテレビや雑誌などのメディアのみで触れていた相手国の情報が、交流を通して友人が出来ることで幅が一気に広がる。私はつどいで三日間で日本青年はもちろん、多くの韓国青年と交流をした。短い期間にもかかわらず様々なプログラムを通して仲を深めることが出来た。私がそこで再認識したのはやはり「〇〇の国の人は、△△な性格だ」という決めつけは決して出来ないということだ。もちろんそれぞれの国に国民性というもの存在するがそれが絶対ではない。これは一見当たり前のように感じるかもしれないが、ついメディアのみに接し直接交流をしていないと忘れがちになってしまう。つどいの参加後、この認識をたくさんの人に持ってもらう為に韓国に興味がない人も日韓交流プログラムに積極的に参加してほしいと考えた。しかし、興味のない人に交流を促す難しさという壁もある。そこでただの大学生である私に出来ることは何だろうと考えた時、今回の体験及び感じたことを人々に共有することが興味のない人にも交流の体験を届けることだった。SNSを利用する人が益々増え、私たちは記

者でなくとも全世界に情報を発信出来るようになった。この力をフル活用しない手はない。私は今回の体験、そしてつどいを通して日韓交流に対して浮かんだ疑問や自身の思いを綴った。また今回のつどいの感想を日韓両青年ともSNSに掲載している人も多く、各々がどのようにつどいで経験を感じているのかを知れることが出来た。

そして、今回のつどい参加を通して日本の文化を見つめ直すきっかけにもなった。つどいでは縁日の企画として簡易なお祭りブースを実行委員の方が用意してくれた。いつもならあまりにも平凡すぎてつまらないと感じてしまうような「かるた」や「けん玉」も韓国青年が新鮮に楽しんでいる姿を見ると日本の伝統的な遊びとして長く受け継がれてきた大切なものなのだと感じた。また、韓国青年がチマチョゴリを着せてくれた時、複雑な結び方を迷うことなく結んでいる姿を見てとてもかっこいいと感じた反面、私は浴衣の着付け方を知らないことに少し恥ずかしく感じた。国際交流は、相手国の文化の理解、発見はもちろん、普段の生活では気がつきにくい日本文化の特性や良さを感じることが出来るものだ。

このつどいのように日韓青年が共に思い出を作り、相互理解を深める交流をし続けることがこれからの日韓のより良い未来に繋がるだろうとこの三日間で確信した。



仲良くなった韓国青年と一緒に写真を撮る
(筆者左)



日韓文化交流まつりで日本青年が韓国青年に
かるたの遊び方を教える

日韓青年親善交流のつどいに込めた思い

実行委員長

2016年、私は初めて日韓青年親善交流のつどい（以下、つどい）に参加した。韓国語の学習意欲を高めるきっかけがあればと探していた時に見つけたのがつどいだった。両国の青年と複数のプログラムを通して交流や意見交換を行ったことで、韓国語だけでなく、韓国文化に対しても、参加前とは確かに意識が変わったと感じた。私は当時の自分のような状況にいる人だけでなく、初めて日韓交流の事業に参加する人にとっても何かしら心に残る有意義な時間にしたという思いから、今回、実行委員としての参加を決めた。

今年度のテーマは「虹～七色の橋を越えて」である。このテーマには実行委員の日韓交流に対する思いが込められている。今年度のつどいの実施時期は準備期間を含め、両国の関係が敏感な時であった。私たちは、このような時期であるからこそ「人の交流」に意義があると考え、両国の青年がお互いを身近に感じられる3日間にするのを一番の目標とした。そこで「人」ということにポイントを置き、「十人十色であること」そして「一人ひとりが両国を繋ぐ大切な一人であること」を、「虹」と「橋」という言葉に込めた。

3日間の企画はテーマと一貫性をもたせるためにも、七色の虹にちなんで七つの企画を準備した。またつどいの場でだけではなく、両国青年がつどい後にも実践できるような内容にすることを意識した。今年度の実行委員は社会人が多く、仕事と両立しながら毎日遅くまで準備に取り組んでいたのが記憶に新しい。言語の差や年齢の

差など、「差」というものを青年らに感じさせず、皆が前向きに取り組めるような企画にしたいと必死だった。私が担当した企画のうち共同制作では、江戸時代から身近な余興や遊びとして伝わってきた「切り紙」を使って、日韓を繋ぐ「虹」を描くことに挑戦した。「切り紙」は紙とはさみがあれば簡単に楽しむことができるだけでなく、同じデザインを切っても、誰一人として同じ模様が出来ることはないという良さがあった。私たちは「切り紙」一枚一枚を青年ら一人ひとりに見立て、「虹のカケラ」と呼んだ。大きな模造紙に七色の「虹のカケラ」を貼っていくことで、大きな「虹」を表現した。この企画は両国青年だけでなく、実行委員含む全員の力が合わさることで、初めて完成させることができるものだったため、「虹」が出来上がった時は皆に感謝の気持ちでいっぱいだった。

3日間のまとめとして、つどい参加前と参加後のお互いの印象に関して話し合った。つどいには必ずしも日本の文化、韓国の文化が好きで参加したという青年だけがいる訳ではないため、メディアやSNSの情報によって不安を感じながら参加したという青年もいた。しかし、両国青年の多くが、実際に接することで参加前とは良い意味でイメージが変わったという意見を述べていた。私自身、「人の交流」は相互理解を深め、これからの関係を築いていくためにも非常に重要な役割を担っているということを再確認できた。日韓両国を繋ぐ一人に、私もなれていたら嬉しい。



日韓の参加青年と一緒に写真を撮る
(筆者中央)



閉会式で挨拶をする

岐阜県プログラム(7月28日~8月1日)

7月28日から8月1日まで、岐阜県にて地方プログラムを実施した。

一行は、7月29日、美濃和紙あかりアート館と旧今井家住宅を見学した。午後、一行は美濃和紙会館にて町屋ホテルNipponia美濃商家の辻社長から地域の特色を活かした産業に関する講義を受けた。その後、二つのグループに分かれ館内を見学し、美濃和紙作りを体験することで、美濃市の伝統と文化を学んだ。

7月30日午前、一行は各務原市福祉施設を見学し、午後には岐阜各務野高等学校に訪問した。韓国青年は福祉科及びボランティア部の学生との交流を通じて日本の福祉に対する理解を深めることができた。また、世界淡水魚水族館「アクア・トトぎふ」に訪問し、岐阜県はもち

ろん世界に生息する淡水魚を鑑賞した。

7月31日、一行は午前中に長良川うかいミュージアムを訪問し、小グループに分かれ高校生から説明を受けながら館内を周った。午後は、講師からSDGsに関する講義を受け、その後地元青年とディスカッションを行った。

8月1日、一行は岐阜県庁にて、服部敬岐阜県環境生活部長への表敬訪問を行った。

岐阜県プログラムにおける韓国青年の感想としては、「自然に恵まれ癒されるとても良い時間だった」や、「美濃和紙や鶉飼などから日本の伝統を、福祉施設では今の日本が取り組んでいる課題を学ぶことができてすごく充実していた」等があった。



町屋ホテルNipponia美濃商家の社長から説明を受ける
(美濃和紙会館)



福祉科の生徒から説明を受け、介護用具を実際に使用する
(岐阜各務野高等学校)



歓送会にて記念撮影をする
(歓送会)

IYEO活動を支える地域の力

岐阜県青年国際交流機構 受入実行委員

岐阜県では、昨年に引き続き、韓国の青年らを受け入れることになりました。そのため、前回の受け入れ実績を活かして、さらに新たな視点を組み込むような内容を検討しました。全日程を通じて、もっとも印象に残ることは、岐阜県IYEOの活動に賛同してくださる会員以外の一般のみなさんが、それぞれの強みを活かしながら主体的に参加しているのを目の当たりにし、地域の力を感じたことです。

岐阜県IYEOでは、青少年育成と地域活性に関する活動をしており、今回のプログラムでは、日頃の独自事業をきっかけにつながりができた個人や団体とともに、「次世代につながる伝統と文化、地域の福祉を考える」ことをテーマにしました。日本も韓国も、古くから土地に根ざした習慣や文化があり、また、あたらしい技術が生まれて近代化が進み、豊かなくらしが見える国です。しかし、開発が進んでも残すべき大切なものは何か、急激な高齢化社会に直面した若者世代がいま将来に向けて何をすべきか、国境を越えて、世代を超えて共感し、そんなことを学ぶ場を用意しました。

韓国青年らは20代から30代が中心でしたが、日本側は、小学生、中学生、高校生、大学生すべての世代が一緒に取り組める企画を心がけました。連日の猛暑に備え、移動や活動の流れについても十分配慮しましたが、韓国青年のみなさんは、猛暑の中でも次々と真剣に質問をしていました。協力してくださった地域のみなさんも

それに応えて、時間いっぱいまで話し汗をぬぐう姿に、大変感動し感謝でいっぱいでした。

子どもたちは、ちょうど夏休み期間であったことから、家族を巻き込んでこの受け入れ事業にふれることができ、作文や研究作品の題材として交流体験を記録したようです。青年たちと共に時間を過ごすうちに、韓国の言葉や食文化にも興味が湧いて、ぴったり離れられない兄弟姉妹のように手をつなぎ、大笑いしながら熱々のお好み焼きをほおぼる様子を見ると実行委員も嬉しくなっていて、暑さも疲れも吹き飛んでしまいました。事業終了後も、活動先の施設や学校関係者等、あちこちから感想や報告が届きました。まさにこの地域における青少年育成の意義を考える機会になったと、IYEO活動に対する賛同の声や、次回の受け入れを熱望する声を頂きました。

過去、私も内閣府による青年国際交流事業の派遣期間中、多角的な目的をもつ活動や体験を通じて、自分の価値観に様々な衝撃を受けました。それから、このように受け入れ側として、事後活動に携わりながら、いま再び同じような感覚を覚えます。自分が暮らすまちで、地元を見直し、たくさんの魅力に出会い、想いを共鳴する。これが本事業の目指す結果だったのではないのでしょうか。

今後も、次世代の子どもたちが自分の個性を育むやさしい地域をつくる取り組みを推進していきたいと思います。



韓国青年が文化紹介を披露する
(岐阜各務野高等学校)



日韓青年で記念写真を撮影する
(岐阜各務野高等学校)

三重県プログラム(8月1日~4日)

8月1日、バスで三重県に入った一行は、おやつタウンを訪れた。株式会社おやつタウンの常務取締役より講義を受けたあと、工場を見学し、製品を实际作る体験を行った。

8月2日午前は、三重県の相可高校に訪問した。調理で有名な高校であるため、地元青年が韓国青年に和食の作り方を教え、一緒に昼食の弁当を作る時間が設けられた。午後は、高校で行われている様々な部活を見学することで、一層の交流を深めることができた。16時から一行は三重県庁へ向かい、稲垣清文三重県副知事を表敬訪問した。三重県の滞在について副知事と歓談をした。

17時30分からは、ホストファミリーとの対面式を兼ねた歓迎会が開かれた。

歓迎会では三重県職員を始め、ホストファミリーや地元青年等、多くの関係者が参加をし、盛況であった。歓迎会終了後、韓国青年はそれぞれホームステイに向かった。

8月4日、ホームステイから帰着した一行は、地方プログラムの行程を無事終了し、帰京した。

三重県プログラムにおける韓国青年の感想としては、「料理で有名な高校で地元青年と交流しながら和食を作るのがとても楽しかった」「体験や交流を通じて三重をたっぷり味わうことができて良かった」等があった。



工場を見学し、地元青年と記念撮影をする
(おやつタウン)



地元高校生から料理の仕方を教えてもらう
(相可高等学校)



三重県庁にて稲垣清文三重県副知事と記念品を交換する
(表敬訪問)

日本・韓国青年親善交流事業 三重県プログラムについて

三重県青年国際交流機構 受入実行委員長

今回15年以上ぶりに三重県にて韓国青年を受け入れるに当たり、実行委員会メンバーの状況や両国間の情勢など懸念されることや直前での変更が多かった中、無事プログラムを終えることができたことは本当に良かったと思います。

【①企業訪問：地元青年とのおやつタウン見学】

三重県の地元から世界進出をしている企業への訪問ということで、津市で製造したおやつを世界で販売しているおやつカンパニー株式会社が全国展開するスナック菓子「ベビースターラーメン」をテーマにした工場一体型のテーマパークを運営するおやつタウン株式会社への訪問を行った。

当初は社長よりご講義頂く予定だったが、ご都合の関係で常務より代表的な商品の製造工程や現在の進出国などについて簡単にご講義頂いた。

その後、訪問直前にオープンしたばかりの「おやつタウン」内で地元青年から三重県紹介を行い施設内のグループ散策・日韓の若者文化についての意見交換・ベビースターの製造体験などを行った。

地元青年との交流では楽しそうに話し込む姿もたくさん見られたが、「おやつタウン」が子供向け施設で夏休み中で混雑していたことやプログラムの直前での変更もあり、一部韓国青年には満足いただけなかったのは残念だった。

【②学校訪問：三重県立相可高等学校にて調理実習と日本文化体験】

各種国内外のコンクールで入賞をしている相可高等学校調理部の生徒さんとの日本食（海苔巻き・だし巻き卵・水まんじゅう）の調理体験と書道部・華道部・茶道部・弓道部の生徒さんに協力頂き、日本文化の体験を行った。

また韓国青年からもテコンドーなどの文化紹介をいただいた。

弓道の体験では、韓国にも弓道はあるがなじみが無く学校の部活動で取り組んでいる事に驚いている姿や屋外で暑中だったが楽しそうに体験をする姿を見られてよかった。

屋内の体験では各ブースを青年たちが思い思いに周り、書道のブースでの扇子作りや茶道などいろんな体験をして楽しんで交流していたのではないかと思います。

今回相可高等学校では、調理部さんへ研修に来ている韓国の大学生の方に調理の時にお手伝い頂き、スムーズに行えたが、文化交流の時はお互いの言葉への不安から生徒さんと青年たちの交流をうまくすすめられず、実行委員としての次回以降の検討事項が残った。

【③表敬訪問・ホームステイほか】

今回三重県では稲垣副知事を訪問し、和やかに会談を行った。両国の政情により、マスクミ対応など例年にならない配慮が必要な場面もあり、「表敬自体を行うかどうか」という話も出たが問題なく行え本当に良かったと思う。

ホームステイでは三重県では近年船事業の受け入れが続いた点や当日県内各地で大規模なお祭りが行われている事、募集期間が短くなってしまった事などの条件が重なり、リピーターのご家庭からも応募が少なく、必要家庭数の確保にかなり苦慮した。

しかし、受入れをしていただいた御家庭や青年からは一緒に料理をしたり、県内各地を訪問したりと楽しんでいただけようかかえてよかった。



三重県立相可高等学校にて調理実習を行う



韓国青年が弓道を体験する

ホストファミリー感想文

素敵な出会い～ホームステイを受け入れて～

三重県ホストファミリー

8月に韓国青年団が三重県に来県しました。そこで、子どもにとっても多文化に触れる良い機会だと思い、我が家でホームステイを受け入れることにしました。

ホームステイマッチングで、我が家には女の子2人がホームステイすることになりました。

初日には、日本最大級の露天風呂と言われる長島温泉に行きました。2人とも最初は大浴場に少し不安そうでした。しかし、行ってみると2人とも、数々の露天風呂で大興奮し、閉館時間いっぱいまで満喫しました。

2日目には、竹を切り出し、流しそうめんをしたり、浴衣を着てお祭りに行ったりしました。午前中に地元のお店に買い物に行った時に、2人の提案でチヂミの材料も買いました。日本に売っている材料で、一緒に料理をし、本格的なチヂミを作りました。日本と韓国の料理両方を堪能できるランチになり、とても和やかなひと時が過ごすことができました。もちろん、味も絶品でした。

また、お祭りでは七夕飾りを背に、沢山の写真を楽しく撮影する姿を見て、嬉しくなりました。

最終日は、朝食を食べてすぐに集合場所へ移動するという、少し慌ただしい日となりました。しかし、出発前

に素敵なお手紙のプレゼントをもらい、涙のお別れとなりました。

2泊3日という短い間でしたが、日本の夏らしい経験をしてもらうことができ、とてもよかったです。

わが家にホームステイをすることが決まり、最初はおもてなしができるか、そして日韓の政情不安の中の受け入れで大丈夫だろうか、不安でした。また、ホームステイ受け入れが初めてで、祖母は暑い中、純日本家屋への宿泊でいいのかととても心配をしていました。しかし、祖母も2人の笑顔を見て安心したようで、我が家の滞在をとても楽しみました。祖母にとっても、とても楽しい思い出になったようで、今でもその時の思い出を楽しそうに話してくれ、受け入れて本当に良かったと思います。

今回の経験を通して、このような情勢だからこそ、私たち一個人としての交流を大切にしていくことの大切さを感じました。

次は我が家が韓国に行き、2人に再会しようと計画中です。こんな素敵な出会いをくれた、内閣府青年国際交流事業、そして、韓国青年代表団の皆さまに感謝です。



日本の食材を使い韓国青年とチヂミを作る



浴衣を着てお祭りを満喫し、家族で記念写真を撮る

東京プログラム(8月4日～6日)

8月5日午前、評価会を行い、「本事業に参加して学んだこと」「今後この経験をどのようにいかしていきたいか」「プログラムの改善点等」の3点についてグループディスカッションを行った。韓国青年各々の事業の成果を振り返るとともに、今後の活動に向けての展望を話し合った。

11時45分からは、福田正信内閣府青年国際交流担当室長主催の歓送昼食会が開催された。歓送昼食会では、今回の招へい事業関係者が集まり、親しく懇談するとともに振り返りを行った。

5日午後、韓国青年は日本青年との都内視察を行った。日本滞在中に出会った日本青年が多数駆けつけ、彼らの案内のもと、グループに分かれて都内を視察した。日韓両国の青年は日本語・韓国語・英語をおりませながらさらに交流を深めることができた。

翌6日午前、韓国青年はパナソニックセンター東京を訪問し、日本の最先端の技術を体験した。その後、お台場にて自由視察を行った。一行は14時に、成田国際空港へ向かい、17時20分発KE702便で帰国の途につき、15日間の日程を無事終了した。



二週間のプログラムを振り返る
(評価会)



最後に空港で記念撮影する